

環境から生まれる生命観

—チベットの鳥葬文化を通して見る—

鄧 秀
文化環境学大講座

The View of Life Formed Through Environment
-Focused on Tibetan Culture of Sky Burial-

Xiu Deng

Laboratory of Correlation Between Environment and Humanity

School of Human Science and Environment

University of Hyogo

1-10-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

はじめに

チベット民族の生活している青藏高原（中国の南西部にあり、チベット自治区・青海省の全域、甘粛省・四川省・ウイグル自治区の一部が含まれる高原）は地球上で最も高い高原地帯として知られ、「世界の屋根」と言われる海拔 8848 メートルの世界最高峰であるチュモランマを有し、南極と北極につき、「第三極」の「高極」と呼ばれている。「第三極」というのは南極・北極と同様に寒冷や酸素不足など自然の極めて厳しいことを意味する。青藏高原の面積は 230 万平方キロメートル、中国総面積の 4 分の 1 を占め、ヨーロッパ総面積に相当し、日本総面積の 6 倍に当たる。250 万人のチベット民族の人々はこの広い高原の草原、谷間、平野、山林などに散らばって生活しており、それぞれ特色のある生活様式、風俗習慣を持っている。故にチベット人の葬礼は多種多様で、しかも極めて神秘的であると思われる。そのうち最も知られているのは鳥葬である。

人間はこの世に生まれてくる様式を自分で選べないが、自分の望みで死後の儀式を決めることが可能である。よって人間は自分の生活環境、宗教信仰、文化様式や価値観などから人生の最後を締め括る儀式を決める。世界の屋根で生活しているチベット民族の人々は何故死後の儀式として鳥葬を選択したのだろうか、また、彼らは何故同じ仏教徒の多い日本や中国の漢民族の人々と全く異なり、この独特の方法を選んだのだろうか。チベットの鳥葬について、いままでの研究は宗教的側面から考察・分析するものが数多く見られる。し

かし、宗教的側面以外に、特にチベット民族の人々が生活している自然環境、さらにその自然環境から生まれた文化背景・思考様式からの考察はまだ少ない。本稿では宗教以外の側面から、鳥葬、そして鳥葬を生み出したチベット民族の人々が生活している自然環境、その自然環境から生まれたチベット民族の人々の生命観に着眼して考察することにしたい。

具体的には、①チベットの自然環境、②自然へ回帰する鳥葬、その起源と継承、③鳥葬文化を通してみるチベット民族の生命観を考察することによって、鳥葬とチベット民族の人々の環境保護意識との関わりを探りたい。

1 チベットの自然環境

チベット民族の人々はブータン、ネパール、インド、中国の 4 カ国に分布しているが、その人口の大部分は中国のチベット少数民族自治区、青海省、四川省、甘粛省、雲南省などで少数民族として住居している。チベット民族の人々が主に生活している地域は中国の南西部に位置する青藏高原である。青藏高原はチベット自治区・青海省の全域、そして四川省・甘粛省・新疆ウイグル自治区の一部が含まれており、地球上で海拔の最も高い高原地帯として知られている。その面積は約 230 万平方キロメートルで、中国総面積の 4 分の 1 を占め、ヨーロッパの総面積に相当し、日本総面積の 6 倍に当たる。チベット自治区内だけに、海拔

8000メートル以上の高峰が6つ、7000メートル以上の峰が50あまり、6000メートル以上の峰が数え切れないほど存在している。平均海拔は4000メートル以上あり、日本の最も高い山である富士山の3776メートルより高く、万年雪で覆われている高峰や氷山が極めて多い。チベット自治区は中国総面積の8分の1、日本の3倍以上の広さの120万平方キロメートルにもわたる。⁽¹⁾ また「世界の屋根」と呼ばれている海拔8848メートルの世界最高峰のチュモランマを有する。

チベット自治区全面積の3分の1を占め、平均標高が4500メートル以上である蔵北(チベット北部)高原は崑崙山脈(万年雪と氷川の最も集中している地域)、唐古拉山脈(主体部分は海拔6000メートル以上で、5300~5550メートルの高さのV形の谷と氷川が至る所にある)、岡底斯山脈(6000メートル以上の峰は25個あり、主峰のチベット名は“聖なる雪山”、仏教の聖地として有名)、念青唐古拉山脈などの高い雪山に囲まれている広大な高原である。この蔵北高原は長さは約2400キロメートル、幅は約700キロメートル、高原の大部分は岩石や砂利からなり、牧草が少なく、寒気の厳しい砂漠である。蔵南(チベット南部)河谷は岡底斯山脈とヒマラヤ山脈との間にあり、山脈に平行して東西に走る縦谷であり、谷底の標高は4000メートル前後もある。東部は降水量が比較的豊富で草原があり農業も可能である。山の雪溶け水が多く、川を作り出し、ヤルツァンボ川はその代表的なものである。ヤルツァンボ川の平均海拔は4500メートル、世界で海拔の最も高い川で、その長さ2057はキロメートル、中国で第5番目の大河と知られている。西部と北部には多くの内流川があり、またそれらが様々な湖や川を生みだし、広大な高原の湖の周辺には草原が広がっている。チベット高原には1500個あまりの湖があり、その総面積は2.42万平方キロメートルを占め、中国の湖の総面積の3分の1を有する。⁽²⁾

チベット民族の人々はこの広大な高原の草原、谷間、山林、平野などに散らばって生活している。森林で猟をし、草原で放牧し、平野や山間で農耕し、自分の独特の文化、言語、宗教、伝統を持っており、民族特性の非常に色濃い民族として知られている。チベット自治区は中国で人口密度の最も低い地域で、1キロ平方メートルあたりは僅か2.21人しかいないのである。チベット民族の人々

はチベット語を用い、チベット仏教を信仰する。⁽³⁾

2 自然へ回帰する鳥葬、その起源と継承

鳥葬とはハゲワシという自然界の生き物を通して、死者の遺体を処理し、亡くなった人の肉体がこの世から完全に消えてしまう葬礼で、チベットで最も多くの人に行う葬礼である。

2-1 鳥葬の起源

「鳥葬は古く中央アジアに住み、のちにイラン地方に入って、ペルシア帝国を築いたアールヤ人⁽⁴⁾が古代イランで実践したのがその起源と見られている。」⁽⁵⁾ 紀元前6世紀にイランで興ったゾロアスター教⁽⁶⁾は、土・水・火を崇拝し、それらのものが神聖であると信じていた。また、死者の遺体を不浄のものとしてとらえ、土・水・火を汚すことになる火葬や土葬を嫌がっていた。神聖であるものを汚すことのないように、ゾロアスター教徒のイラン人は死者を「沈黙の塔」(ダフメ dakhme)の頂の内部に置き、鳥が食い尽くして自然に回帰する方法を取っていた。

「その時期、一部のイランの遊牧民はイランにとどまらず、シベリア、アジアの大草原地帯で移動生活をしていた。」⁽⁷⁾ その中の一支である「月氏」⁽⁸⁾は紀元前3世紀頃にフン族(Hun族)⁽⁹⁾に征服された。その後、月氏族の多くの文明や文化がフン族のそれに影響を与えた。「それらの人々の一部はアフガニスタン、チベットに移動し、鳥葬の習慣を伝えた可能性がある。」⁽¹⁰⁾ この人間の遺体をハゲワシに食わせる方法で死者を送るのは、日本語では鳥葬、中国語では天葬、英語ではSky Burialというが、チベット語ではジハーター(jhator)と言い、「施し物を鳥にあげる」を意味する。

2-2 鳥葬の継承

鳥葬の起源地と思われるイランにおいては、1930年代にレザー・シャー⁽¹¹⁾によって「沈黙の塔」で行われた鳥葬が禁止され、現在数多くの「沈黙の塔」は遺跡として残されている。またインドのボンベイ一帯やパキスタンでも「沈黙の塔」が存在しており、イランのパールス地方からインドに移住して、パールシー⁽¹²⁾と呼ばれるゾロアス

ター教徒達は今でもゾロアスター教の聖典のアベスターの祈祷文を唱え、聖火を灯して、中には教義に従って「沈黙の塔」に遺体を置き、ハゲワシに捧げる者もいる。しかし近年、家畜薬の diclofence（インド政府は 2005 年にその使用を禁止した）による中毒のため、ハゲワシの数は大量に減少し、生き残ったハゲワシは遺体を食べきれないという現象が起こっている。もしハゲワシの数がこの先も減少し続けるなら、この伝統には終止符を打たざるを得なくなってしまう可能性があり、インドにおけるパールシーコミュニティはこの伝統の儀式を守るために、ハゲワシを捕獲して繁殖を手助けすることになっている。

チベットは 1950 年代から、中華人民共和国の一部となった。1960 年代から 70 年代にかけての文化大革命の混乱時期に、鳥葬が宗教信仰とともに禁止された時期もあったが、80 年代からその伝統の葬祭が再び行われるようになった。チベット自治区政府が 2006 年に公布した「天葬管理暫行規定」（鳥葬管理に関する暫定規定）の中には「鳥葬はチベット民族の葬祭習俗であり、国家法律の保護を受ける」とある。また、近年チベットに観光客が急増していることもあって、鳥葬現場については「鳥葬現場に対して、写真・撮影・録画・見物にすることを禁ずる。新聞・雑誌・ラジオ・映画・テレビ・インターネット等で無断に鳥葬に関する文字・写真・報道等を禁ずる」、さらに鳥葬台の保護のために「いかなる団体、個人も鳥葬台周辺での射撃・発破・笛などを鳴らすこと、石・土・砂を採取することをしてはならない」、または「中毒死・原因不明な急死・伝染病等の遺体は鳥葬台に運んではいけない」とし、「鳥葬師は鳥葬職業に従事する専門職で、尊重を受けるべきであり、いかなる団体や個人も鳥葬師を差別視してはいけない」⁽¹³⁾と明記している。チベット自治区民政庁（庁：直轄市・省・自治区レベルの政府機関の一部門）の調査によると、2006 年現在チベットには 1075 カ所の鳥葬台があり、100 名近くの鳥葬師がいる。⁽¹⁴⁾「我々は火葬を奨励するが、鳥葬も認めている」⁽¹⁵⁾とチベット自治区の副区長は述べたが、「チベット鳥葬の習俗は千年以上の歴史があり、現在 8 割以上のチベット民族の人々は鳥葬の葬祭習俗に従っている」⁽¹⁶⁾とチベットの鳥葬習俗に関する研究をしているチベット社会科学民族研究所所長の巴桑旺堆は述べた。「政

府から鳥葬台保護の措置をとられ、千数百年前から形成された葬祭習俗の継承ができ、チベットの人々にとって本当に幸せなことである」⁽¹⁷⁾とチベット鳥葬師の赤列曲桑氏がその心情を語った。

2-3 自然へ回帰する鳥葬

鳥葬は一般的に人が亡くなって 2, 3 日後から一週間後に行われる。まず遺体は住み慣れた家に安置され、僧侶（普通は住居する教区内、特に直接関係ある寺院の僧侶）の読経によって魂が肉体から解き放される。葬礼の前夜に僧侶と家族は夜を徹して経を唱え、その経は一般的にチベット密教蓮花の「六字真言」の「オム・マ・ニ・ペ・メ・フーム」（チベット語の発音は Aom, Ma, Ni, Pad, Me, Hong）⁽¹⁸⁾を用いて、死者の魂を済度する。「六字真言」はインドからチベットに伝来し、チベット密教で最もよく唱える真言の一つであり、僧侶も一般の民衆も日常生活でもよく唱える。これを唱えることによって、すべての罪悪が除かれ、六道輪廻の衆生が救済できるとされている。

鳥葬の具体的な方法については、BBC 世界の屋根探検会の「チベットの独特の葬儀」に書かれており、ここでその大筋を紹介する。

一般的に早朝から葬列が出発し、魂の離れた単なる遺体を鳥葬台に運ぶ。鳥葬をする場所は町はずれの山のかげなどである。まず死者を大きな自然石の鳥葬台の上に安置する。その周辺に松などの香木を積み上げ、その上にツァンバ（麦こがし粉を湯やお茶で練ったチベットの食べ物）などを撒いてから点火し、煙がもうもうと立ちこめる。それは「神鷹」と言われるハゲワシに葬礼を知らせるためである。ハゲワシには、この煙を見ると食物を探し出す習性があると知られている。

この時から鳥葬が始まる。まず死者の背中から解剖していく。解剖は背中から腹部にいたり、内臓を取りだし、肉を切り刻み、頭の皮は剥ぎ、頭蓋骨を割り、骨を砕く。それらをツァンバで捏ねて、団子状に作る。ハゲワシに与えるのはまず骨の部分から、そして肉の部分へと移る。こうして死体を少しも残すことなく、大自然に回帰させるのである。⁽¹⁹⁾

また、1999 年 7 月 12 日のニューヨークタイムズで「死と自然を繋ぐチベットの鳥葬」（Tibet's Sky Burial Lives on to Link Death and Nature）の中で、リ

一ロン (Lirong) 氏は自分の経験を以下のように語っている。

「その日、200 マイル (約 320 キロ) 以上離れているところからトラックで3日間かかってこの最寄りの仏教寺院に67歳の老婦人の硬直した遺体が運ばれ、昼頃に鳥葬の儀式が始まった。儀式が行われる際には、家族がそばにいるのが伝統であるから、死者の夫と息子が付き添い、約1キロ離れた小山の頂上に座っていた。ハゲワシは山の斜面に集まって見詰めている。ロブサン (Lobsang) という名のチベット僧は草のある山斜面に裸の老婦人の遺体を置いてから、近くの石でナイフを磨いた。そして、経文を唱えながら、古い仏塔を一周廻り、アサ布の袋をエプロンのように腰に縛って、手慣れた手つきで順序よく遺体の解体に取り組み始めた。まず、老婦人の手足をナイフで切り外し、腹部を開いてから、強い臭みを避けるために、少し後ろに後退して、暫く時間をおいた。死者をバラバラにして、ハゲワシが食べやすいように、彼は大槌で骨を小さく砕いた。すべての作業は1時間以内で終わった。その後、50羽くらいの巨大なハゲワシが群れをなして、あっという間にすべての肉と骨を飲み込んでしまった。老婦人の姿は完全に消えてしまった。ハゲワシは山に向かい、ゆっくりと空へ飛んでいった。」⁽²⁰⁾

以上のような死者を送る場面の描写を読むと、普段日本で生活している人々は非常に恐れをなしてしまうだろう。世界の屋根で生活しているチベット民族の人々は何故鳥葬を選択したのだろうか、彼らは何故同じ仏教徒の多い日本や中国の漢民族の人々と異なり、この独特の葬祭方法を選んだのだろうか。それは宗教的な側面以外に、彼らの生活している自然環境、そしてその環境から生まれた思考様式から考察することができる。

3 環境から生まれたチベット民族の人々の生命観

葬礼は人間の思考様式による行動であるから、その中に理性的な概念もあり、価値観もあり、感情の表れなどが含まれていると同時に、人間の生活環境、自然環境によって形成された生命観の表れでもある。本論ではチベットの鳥葬を通して、チベット民族の自然に回帰する生命観とそれを生

み出した環境的思考を中心に分析したい。

3-1 人間と他の生き物とのかかわり

チベット民族の人々が生活している青蔵高原は海拔が平均で4000メートル以上あり、高原には雪峰が林立し、平野があるといっても面積は小さく、長細いものが多い。チベット全域の自然環境を見ると、農業に適する土地は全体の1%、放牧に適する土地は54%、3分の1以上の土地は農業にも放牧にも適しない状態となっている。またチベットの土地はとても広大で肥沃であるが、高い海拔による低温、年平均で100~150日の強風という自然環境のなかには、生き物の種は極めて限りがあり、その生存期間も長くない。⁽²¹⁾チベットにおいて、すべての生命が貴重であると同時に非常に短く、生と死が頻繁に繰り返される。よって、すべての資源が貴重であるこの高原で、人間が亡くなった後、土地を占有したり、環境を汚染したりすることは他の生き物の生活の場を奪うことになってしまう。すべての生命を大切にし、自らの肉体を生物への施し物とし、聖なる鳥であるハゲワシを通して大自然に回帰させることができると共に、魂は再び生まれ変わることができると考えられている。雄大で厳しい自然のなかで日々暮らしているチベット民族の人々は人間の生と死は他の生き物と同様に自然の一部であり、平等であるべきだと思っているのである。⁽²²⁾

3-2 遊牧生活と郷土意識

チベットの土地の54%は放牧に適しているため、チベットの人々のほとんどは遊牧生活をしており、ある決まった耕地や土地に対する依存性が強くない。このような遊牧生活において、チベット民族の人々はいわゆる故郷という特定の場所を持たず、物質的にも精神的にも土地と疎外してしまい、土地に頼って生きていくという意識が薄い。土地は命の源であるから、亡くなった後、土地に戻せば極楽往生できるという漢民族の考えはチベット民族には通用しない。

中国の漢民族は古来から儒教を尊び崇め、約2500年前に儒教思想の先祖である孔子は、親への孝道について述べた『孝経』のなかで、「身体のすべては両親から授けられるもので、傷を付けてはいけない。人が亡くなった後、土葬だけが正道である」⁽²³⁾と記している。しかし、チベット民

族の人々は命が天の神から賜るものととらえ、またその終焉も天の神が定ずるとしている。命が尽きたら、その肉体が大地から消えてしまうのは当然であると思っている。⁽²⁴⁾

また、遊牧民は農業に従事する民と異なり、水と草を追い求めて頻りに居所を移さなければならぬため、亡くなった肉親を彼らの構うことのできない場所に置くのが、彼らにとって心理的にも、感情的にも圧力が大きい。むしろ大自然に回帰させ、混沌としている世界から消えてなくなったほうが彼らにとって最も良い慰めであり、鳥葬はそれを実現する最も理想的な方法であると思われる。さらに、高原という環境に生まれつき肉類を食物とするハゲワシの存在は事実上チベットの人々の昇天という願望の実現を手伝ったのである。

3-3 厳しい雪域の大地

チベット民族の人々が生活している青蔵高原の自然環境をみると、海拔が高く、極度に寒く、青蔵高原の大部分の地域は長期にわたって凍土状態にある。夏でも地面から1メートル以下となると、恒久の凍土状態で、掘り起こすのは非常に困難である。特に昔生産・生活手段の発達が遅れているチベットでは、鉄器の使用は一般民衆の生活領域での普及は非常に限られており、長い間粗末な木器や石器のような原始的な道具しか持っていなかったため、堅い永久凍土を掘り起こして死者を埋葬することは不可能に違いなかったらう。

また、極少数であるが一部の山林、山谷の農業地域において火葬を行う人もいる。しかし草原に遊牧している遊牧民は普段牛や羊の糞を燃料として日常生活を行っている。動物の糞は集中的に猛烈な火災を出すことが難しく、火葬の燃料としては使用できない。「チベットにおいて様々な形で葬儀が行われるが、最も多く見られるのはやはり鳥葬である。燃料が不足し、掘り難くて環境の厳しい地帯で生活しているチベット民族の人々にとって、鳥葬は最も適した選択である。」⁽²⁵⁾

3-4 自然環境と生命の輪廻観

仏教のチベット伝来以前には、前述した通り、鳥葬は既にイランから伝わってきていたが、その時期のチベット民族の人々の生命に対する認識は仏教的な要素がなかった。古くから祈禱を中心とした独自の宗教形態を取っていたボン教⁽²⁶⁾はチ

ベットの民族宗教であったが、仏教が伝来し、チベット仏教として栄えるに従って衰微した。現在のチベットにおいて、「ボン教、カトリック教を信じる極少数の人以外に、チベットの殆どの人々はチベット仏教を信仰する。」⁽²⁷⁾チベット仏教は仏教の一派で、7世紀前半吐蕃王国のソンツェン・ガンポ⁽²⁸⁾の時代にインドから伝えられ、大乘仏教と密教の混合形態となり、チベット大蔵経を用いる。仏教が伝来し、チベット民族に受け入れた理由について、1996年エミー賞ドキュメンタリー部門賞を受賞した「Tibet: the End of Time」で次のように述べている：「仏教はインド平原からヒマラヤ山脈に入り（中略）、チベット高原は世界で最も人里離れた荒々しい辺境で、慈悲に基づいた信仰が生き延びられたのは、その環境の過酷さゆえでもあると言われている。標高が5400メートル、広大で荒涼たるヒマラヤ高原では、人々は自然の力に対して謙虚になり、彼らのいる場所が生命のより大きい体系の中の一部であることを認識するには、ただあたりを見渡すだけで十分である。土地というものは我々人間にとってかなりの影響力を持っている。土地は生活のあらゆるものを支配する。その結果、人間は自分のアイデンティティとエゴの限界を思い知らされる。」⁽²⁹⁾世界の屋根で生活しているチベット民族の人々は、遙か昔から厳しい自然に生命間の相互依存関係を知らされ、「衆生平等、生命のチェンは相互依存の生態観を教えられていた。」⁽³⁰⁾チベット仏教は地理的・環境的な影響によって、インドから伝来後、他の地域の仏教思想とは違った独自の成熟を遂げた。

仏教の伝来とチベットでの定着によって、肉体と精神との分離、魂の不滅、肉体が重要なものではないという考え方はチベットで広く根付き、仏教の六道輪廻はチベットの鳥葬に宗教的理論根拠となって、鳥葬はチベット民族の人々にさらに広く受け入れられるようになったのである。

霊魂は輪廻転生を果たすために、純粋で高尚な魂でなければならない。人々は自ら積極的に他者のために自らのことを犠牲にして、自分の肉体をハゲワシの餌にすることで、大自然に消えてしまうことにより、後人に負担をかけず衆生に平和かつ安定な生活環境を与えることで、善行を積む。このような功德があると、生前の犯した過ちや罪から解脱され、悩みや煩うことから解放され、魂

が輪廻する際に報われ、極楽世界に行ける可能性がある」と期待しているのである。

おわりに

チベット民族の人々が生活している西藏高原は地球上の第三極と呼ばれている。即ち、南極と北極につき、「高極」と呼ばれる地球上の最高峰で、南極と北極と同様に、寒冷や酸素不足など自然の極めて厳しいところを意味する。チベット民族の人々はまずその地球上の第三極の自然環境に直面しなければならない。

空が晴れたり曇ったり幻のように変わり、河や川が季節によって様子が全く異なり、日月星辰が手の届くような世界の屋根という極めて直感的、変化の激しい自然環境で生活するチベット民族の人々は、普通の平原で生活している人々と比べ、地・水・火・風など自然の強大な力をより鮮明に感じている。また地・水・火・風は世界を主宰し、自然界の千変万化や万物の生存は魂の力からなっていると信じられている。人間を含めたすべてのものは、魂を持っており、しかもその魂は永遠に存在する不滅のものと考えられ、死亡は魂が消失するわけではなく、魂のキャリアーが枯渇しただけで、その魂が新しいキャリアーのところで再生することができると思われている。従って人間の体はただ生命の付属品すぎず、重要視する必要がなく、大自然に回帰させるのは当然であると考えている。

地勢が高く、気候が寒い西藏高原で生活しているチベット民族の人々にとって、高原のすべての生命が貴重であると同時に非常に短く、生きていくためにはすべての命の相互依存が非常に重要なことになる。

西藏高原という厳しい生存環境はチベット民族の人々に自然生態の保護、すべての生命の共存という意識をもたらした。地球上のほかの地域において、近年漸く人類がすべての生命と共生しなければならないということを認識しはじめたが、蒼穹に最も近いと言われるチベット民族の人々は自然の変化の激しい高原という環境の中で、遙か昔からすべての生き物が平等で、他の動植物は人類と同様に生存の権利があり、人類が他の生命と助け合い、保護し合い、よい生存環境を保たなければならないと認識した。さらに仏教の伝来によって

「衆生平等」の考えがこの意識を強化し、雪域に生活しているチベット民族の人々の生命観の一部となっているのである。

鳥葬はチベット民族の人々の生命観の本質を表す行動であると言えよう。チベット民族の人々は自分の命が終焉を迎えた後、土地を占用せず、空間を使わず、生活用水を汚さず、大自然に消えてしまう方法で、生きている人に精神的にも経済的にも負担をかけずに、有限な空間と清潔な環境を他の命に残しておくことにしている。

また、チベット民族の人々は自然に対する感受性がどの地域の人よりも強く、自然を保護する意識も非常に強いと言われている。生きている間に、チベット民族の人々は無駄に草原の開墾、森林の伐採、地下の鉱物の採掘をせず、常に天の神から賜うすべての生態資源を保護し、大事に使用する。死んだ後も、飢えた動物を救うために、自分の最後の持ち物である遺体をハゲワシに食べさせ、大自然を報いることで善行を積むのである。

自然環境の厳しい西藏高原であらゆる生命が脆弱であるにも関わらず、高原の生態環境は遙か昔から広大な循環を繰り返し、「中華水庫」として、中国の大地を潤し、中央アジアの気候を調節することに大きな役割を果たしてきている。これはチベット民族の人々の環境保護意識、及びその意識から生まれてきた献身的な葬礼のためでもある。いままでチベットの葬礼、特に鳥葬に対して、不理解や偏見を抱き、野蛮な方法と思われることもしばしばあるが、チベットの葬礼は地球上のすべての葬礼の中で、最も合理的で、人類とほかの生き物と共生を果たすために大いに貢献している点で、世界に注目され始めている。

注：

(1) 朶蔵加 著 『雪域的宗教 宗教与文明転承 宗教与教法儀軌 上冊』 宗教文化出版社
2003年9月 p.2

(2) 『中国西藏事業与数字』、
「2002年西藏自治区最新情報」

<http://www.tibetology.acn/Web/number2002/one/dili/main.htm>

(3) 岩波書店『広辞苑 第5版』「チベット」

(4) アーリア人：アーリアとも言う。広義にはインド・ヨーロッパ語族を指す。狭義にはその支派で、古く中央アジアに住んでいたが、後にイン

- ドに入ったアーリヤ系インド文化の土台を築いたインドアーリヤ系と、イラン地方に入ったペルシア帝国を築くことになった種族を指す。
- (5) Sky Burial -Wikipedia, the free encyclopedia
http://en.wikipedia.org/wiki/Sky_burial
- (6) ゴロアスター教：ゴロアスター（Zoroaster）はイランで興した宗教で、開祖の実在が確実視される創唱宗教として世界最古級となる。拝火、ダラメ（沈黙の塔）での鳥葬・風葬など独特な祭祀を持つ。アラブによるイラン征服まで国教的地位を保ち、イスラム化の後も存続して、インド（パールシー教徒）、イラン、パキスタンに10万人を越える信者がいる。
- (7) "Origins of Tibetan Sky Burial"-Wikipedia, the free encyclopedia
http://en.wikipedia.org/wiki/Sky_burial
- (8) 月氏：中国の秦～漢代に中央アジアで活躍したイラン系遊牧民族である。戦国時代にモンゴル高原の西半を支配する大勢力であったが、紀元前176年頃、匈奴の冒頓単于に追われ、その主力の大月氏は天山山脈の北方に移動、黄河の西に残存したものは小月氏といわれている。
- (9) フン族：中央アジアの騎馬民族、トルコ系、モンゴル系、あるいはその混合ともいわれる。匈奴と同一かは不明。4世紀から西進を始め、東ゴートを服属させ、西ゴートを追って民族大移動の発端を作った。5世紀半ばアッティラのものとで大帝国を建設した。
- (10) "Origins of Tibetan Sky Burial"-Wikipedia, the free encyclopedia
http://en.wikipedia.org/wiki/Sky_burial
- (11) レザー・シャー（1878 - 1944）はイラン国王（在位1925 - 1941年）。1921年クーデターに成功して軍事司令となり、国政の実権を掌握。
- (12) パールシーは8世紀イランのパールス地方からインドへ移住したゴロアスター教徒の子孫のことを指す。ボンベイを中心に各地に住居する。「沈黙の塔」で行われる鳥葬の風習が知られる。
- (13) 「西藏自治区政府公布《天葬管理暫行規定》通知」新華社 2006年3月
<http://www8264.com/15090.html>
- (14) 同上
- (15) Lirong "Tibet's Sky Burial Lives on to Link Death and Nature" July 12, 1999
 The New York Times
- (16) 「西藏自治区政府公布《天葬管理暫行規定》通知」新華社 2006年3月
<http://www8264.com/15090.html>
- (17) 同上
- (18) 朶蔵加著『雪域の宗教 密宗与修持 信仰与人生 下冊』宗教文化出版社
 2003年9月 p785-786
- (19) B B C世界の屋根探険会 「チベットの独特の葬儀」 2003年3月
<http://www.gesandmedoor.jp/uli220.html>
- (20) Lirong "Tibet's Sky Burial Lives on to Link Death and Nature" July 12, 1999
 The New York Times
- (21) 朶蔵才但 格桑本 著 『天葬—蔵族喪葬文化』甘肅民族教育出版社 2000年9月 p.8
- (22) 朶蔵才但 格桑本 著 同上 p.169
- (23) 朶蔵才但 格桑本 著 同上 p.3
- (24) 朶蔵才但 格桑本 著 同上 p.10
- (25) Rachel Laribee "Tibetan Sky Burial, Student Witnesses Reincarnation " River Gazette July 2, 2004 p.9
- (26) ボン教はチベットの民族宗教であり、チベットの固有の神々への信仰、または諸宗教のことを指し、チベットに仏教が伝来以前からあった信仰である。シェンラブ・ミボ（Shenrab Miwo）を教祖とし、9世紀頃から教団を形成するようになり、その総本山はメンリ僧院である。
- (27) 賀中 庄巖 編著『西藏旅行完全手冊』作家出版社 p.58
- (28) ソンツェン・ガンポ（581-649）：チベット最初の統一王朝の創始者。幼くして父親の部長の位を継ぎ、チョンゲ地方を根拠地に全チベットを統一し、さらにインド、ネパールにまで侵入。ラサを都にし、中国およびネパールから妃を迎え、仏教・文字やその他の文化を摂取して、国の基礎を固めた。
- (29) 「Tibet: the End of Time」はアメリカが1995年に制作したドキュメンタリーで、現代社会の中でチベット伝統文化の生き延びるための苦境を描いている。
- (30) 朶蔵才但 格桑本 著 『天葬—蔵族喪葬文化』甘肅民族教育出版社 2000年9月 p.16
 （平成20年9月26日受付）